

令和 7 年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
評価部会

令和 8 年 2 月 3 日（火）

東京都現代美術館

午後 2 時 01 分開会

大石文化施設担当課長代理：本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和 7 年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当の課長代理の大石と申します。本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

次に、本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。私から向かって左の席から順に御紹介をさせていただきます。

青山委員でございます。

続きまして、平野委員でございます。

続きまして、長門委員でございます。

続きまして、石井委員でございます。

続きまして、千葉委員でございます。

続きまして、児島委員でございます。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の渡邊でございます。

同じく、事業企画課長の關次でございます。

同じく、調整担当課長の飯田でございます。

同じく、事業係長の石川でございます。

次に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

一番上でございますのは会議次第、そして、資料 1「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会委員名簿」、資料 2「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料 3「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料 4「令和 7 年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料 5「作家・作品説明書」、評価部会評価表をお配りしております。よろしいでしょうか。

また、お手元の資料については、現時点で未公開の情報等がございますので、会議終了後、回収させていただきます。

議事に入る前に、当部会の公開について御説明いたします。

本日の議事は、評価対象資料の価格評価に関するものでございますので、「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」第 10 に基づき、非公開といたします。

なお、当部会の議事録については、同要綱第 10 第 2 項に基づき、資料収集決定の後、委員の皆様の個別の価格評価を除き、公開を予定しております。公開に当たって、委員の皆様には追って内容の確認をさせていただきます。

また、委員の皆様のお名前と現職名は、東京都のホームページ上にて公開しております。それでは、議事に入ります。

事務局から、収集作品の説明をお願いいたします。

關次事業企画課長：事業企画課長の關次でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

収集作品について御説明いたします。

本日、御評価をお願いする作品は、購入が18件、寄贈が24件、合計42件でございます。

これらの作品の収集については、午前中のコレクション部会で収蔵することが適切であるという御意見を頂戴しております。

今年度お諮りする作品・資料について、当館の収集の基本方針に基づき、首都東京の現代美術館にふさわしい作品を精査いたしました。選定における中心的な視点は、当館のコレクションを体系的、歴史的変遷を網羅する作品であることや、作家研究の深化を進めることができる作品、そして、コレクション展示への有効性、そして、市場動向を鑑みた優先順位などが上げられます。これらを踏まえ、令和7年度の収蔵におけるポイントを幾つか御説明申し上げます。

まず、新進若手作家の支援育成とフォローアップについて。こちらは当館の重要なミッションの一つとなっております。継続的な調査に基づき、時宜を捉えて選出した作家を御提案申し上げます。

そして、コレクションの体系化と美術史的な文脈の補完も重要でございます。今回も優れた作品の御寄贈を受けることができました。作品購入に伴う御寄贈もありますが、多くは日頃の学芸員の調査、そして所蔵者との信頼関係によって収蔵がかなった作品ばかりでございます。

そして、最後に戦後世代の女性パイオニア作家の重点的な収集ができませんでした。前衛芸術運動「フルクサス」で活動したほか、参加型アートの先駆者として国際的に活躍し、昨年9月に96歳で御逝去されました斉藤陽子さんの作品購入について、今年度は付議させていただきます。

それでは、評価いただく作品の詳細につきまして、事業係長の石川より御説明申し上げます。よろしくお願いいたします。

石川事業係長：では、候補作品の概略を御説明させていただきます。

お手元の資料4と5、「収集候補作品一覧表」と「作家・作品説明書」を併せて御覧ください。

資料は購入候補の後に寄贈の候補が続くという流れになっております。購入と併せて同じ作家からの寄贈作品がある場合には、順番が前後いたしますが、寄贈分も併せて御説明させていただきます。

まず最初に、番号1番、斉藤陽子の作品です。当館では初めての収蔵となる作家になります。1929年生まれの作家で、日本女子大学で児童心理学を学んだ後に教師となり、1953年に美術教育運動「創造美育運動」に参加しました。ニューヨークへの渡航を機にフルクサスに参加し、1979年からはドイツのデュッセルドルフに定住して長くドイツを拠点に活動してきました。パイオニア世代の女性作家として収集に向けて調査と交渉を進めてきま

したが、残念ながら昨年9月に96歳でお亡くなりになりました。そのため、様々な事情ですぐに作品を動かすことができなくなってしまったため、委員の皆様には事前に資料をお送りさせていただきましたが、今回は資料での付議により決定を受けた後に、年度内にドイツから美術館に納品するという流れになりますので、この場でもう少し詳細を説明させていただきます。

1番の作品については、出店のような形態の作品で、作家が売り子、鑑賞者が客として参加してもらうことを作品とした斉藤の代表的なシリーズ「ユー・アンド・ミー・ショップ」の流れを受けて2002年に制作された「Takako's Book Shop」という作品です。高さ2.2メートルの木のパネルの上に日よけがついて、その下にデスクが置かれるという形態で、斉藤がドイツに定住後に自身の紙作品をまとめたオブジェ「ブック」シリーズが壁面や上からぶら下がり、店の商品のように展示されているという作品です。

2番も同様に、斉藤の作品となります。2番は作品の大きな要素である遊びを取り入れた「Games」というオフセットのプリントとオリジナルのドローイングを含んだ作品です。自ら主宰したプライベートエディションである「ヌードル・エディション」で制作された7点組のエディションにフォルダー1点、オリジナルドローイング1点がセットになったものになります。遊びやゲームといった斉藤にとって作品の重要な要素が組み込まれた誰でも参加できる場としてのアートを実現した作品であり、プリントにはゲームの指示などが書かれています。斉藤の作品は長らく海外を拠点としていたことも一つの要因ではあると思いますが、国内では収蔵する美術館が少なく、今回の収蔵を機に作家の研究を進め、その成果として展示活用が大いに見込まれる貴重な作品です。

続きまして3番、岡崎乾二郎は既収蔵作家です。本年度当館で開催した個展の出品作となります。彫刻は岡崎にとって初期から造形の志向の中心であり続けてきましたが、90年代に海外へと移り、30年ほどの月日を経て2021年に患った脳梗塞からの回復期の最も大きな挑戦として制作された作品の一つです。

また、4番と5番も同じく当館での個展に出品された0号カンヴァスの作品となります。こちらは2000年代半ばに始まった岡崎の重要シリーズで、当館所蔵作品が80年代後半から2000年代初頭の作品になりますので、時代的にも補完するような作品になっております。

続いて6番から8番、伊藤誠は当館では新収蔵の作家となります。1955年生まれで80年代に活動を始めた伊藤は、先行する世代の成果を背景に彫刻が延伸的に拡張していった中で様々な試行錯誤を行って、彫刻の体験を問う作品というような作品を制作してきています。今回候補に挙げさせていただいているのは、ステンレスメッシュの作品、FRPを用いた作品など表現に合わせて様々な素材を用いた作家の代表作とも言える作品です。

続きまして、9番の笹本晃、こちらも新収蔵で、今年度当館で個展を開催したミッドキャリアの作家となります。2010年に発表された初期代表作の「Strange Attractors」を当館での個展の会期中に複数回行ったパフォーマンス、そのうちの1つを描いた作品です。作家がダイアグラムと呼び、パフォーマンス中に即興的に描くドローイングで、パフォー

マンスを主とした表現とする作家にとっては、行ったパフォーマンスの成果とも言える作品です。

また、併せて番号が飛びますが、35番のほうに寄贈で1点、笹本晃の作品、こちらも今回の個展のために個人コレクターの方から借用した作品、こちらも併せて御評価いただければと思います。

続きまして10番、11番、こちら益永梢子も新規収蔵の作家となります。1980年生まれの作家で、カンヴァスを起点として紙や布など多様な素材を用いて空間との関係性を考察する作品を制作しています。2013年初期の代表作、そして2015年の作品併せて作家のキャリアの中でも代表的な作品を御評価いただければと思います。

続きまして12番、13番です。高橋大輔、こちらも新規収蔵で、同じく1980年生まれの家です。絵の具を幾重にも塗り重ねる厚塗りの作品を多く制作してきましたが、その中で2025年の個展で発表された作品群を挙げさせていただいております。絵画の可能性について一貫して追求してきた作家が、近作によっていろんな変遷の中で行き着いた一つのマイルストーンとして重要なシリーズであり、また、この世代の動向を示し得るものとして重要な作品群であると判断いたしました。

こちらも番号が飛びますが36番、こちらに同じ個展で発表された作品、こちらも寄贈としてここに来ております。

続きまして14番、15番、ユアサエボシは、昨年度もコラージュの作品を収蔵した作家ですが、今回、現在開催中の「MOTコレクション展」に合わせて作品を借用し、展示中の絵画を候補とさせていただいています。大正生まれの架空の画家ユアサエボシが描いた作品というユーモアも含まれるコンセプトで、今回は対称の構図となっている2点の絵画を候補として挙げており、従来の美術史や過去の視点の再考などを試みた作品で、当館が既にコレクションしているユアサの作品を補うだけではなくて、当館のほかのコレクションとの組合せなど様々な活用が考えられる作品です。

続きまして、16番の臼井良平も新収蔵となります。こちらは昨年度開催の「MOTアニュアル2024」の出展作家で、その出品作品の「Fence」のサイズを幅を3.6メートルにリサイズしたバージョンとなります。フェンスの網目に作家によってつくられたガラスのペットボトルとスーパーボールを挟み、バッククローガーを配置しているという作品になります。プラスチックの製品をガラスによって精緻に再現して、日常の光景を切り取るというシリーズを手がけてきた臼井の代表作に位置づけられる作品になります。

続いて17番、庄司朝美も同じく新収蔵で「MOTアニュアル2024」出展作家です。今回の購入作品は「MOTアニュアル」の出品作品でもあり、展示作品の中でも最も大型の作品を候補として挙げ、これまでの作家のキャリアの中でも最大規模の作品となっております。絵の具を拭き取ったり引っかいたりするという行為を重ねて人物や動物、骸骨などが交錯するような絵画を制作しています。1988年と若手の作家であり、当館が近年重点的に収集してきた国内の新進作家の絵画作品に連なる作品として今後の幅広い活動を期待して

おります。

39番の寄贈の作品に関しても、同じく「MOTアニュアル」の出品された作品となります。

続いて18番、那須佐和子も今回新収蔵となります。今回の候補の中では最も若手となる1996年生まれの作家です。資料のほうのは画像では分かりにくい作品でもあるのですが、上下で分かれているように見える部分は、同じメーカーで経年時間が異なるカンヴァスを用いて、絵の具をカンヴァスに塗り込めて削って、さらに洗い流すという工程を何度も繰り返して制作された作品です。1つの画面の中でしわや折れや傷といった複数の要素が組み合わさっていることで形づくられており、後ほど実作品で御確認いただければと思います。

ここからは寄贈のみの作品となります。

まずは、19番から28番の中西夏之の作品です。中西は当館で最初に個展を開催した日本人作家で、現在開催中の「MOTコレクション展」で特集展示を行っています。今回寄贈の申出のあった作品は、大きく分けると1991年から93年、最晩年の2013年から2016年のものになります。これらの作品群をまとめて御寄贈いただけることで、1950年代から90年代まで、既に当館で寄贈されている作品に加えて、作家研究として今後の作品研究のために非常に重要になる作品となります。

続きまして29番、山田正亮です。こちらは当館の開館前、1961年と69年制作の水平に引かれたストライプの「Work」シリーズの絵画を2点収蔵していますが、今回個人コレクターの方から寄贈のお申出があり、候補にさせていただいております。サイズとしては小さいながらも作品の多様な展開を感じさせる作品になっており、当館の所蔵する作品に加えることで、山田の画業において一貫してきた線や色彩、色面、そういった関心をより効果的に示すことができる作品であると考えております。

続きまして30番と31番、こちらは菅木志雄の作品です。当館では大型の立体および平面作品6点と写真作品8点を収蔵しています。平面、立体は主に東京都美術館時代の収蔵作品、写真は2015年開催した当館での個展を契機に収集した作品となっております。今回、長年コレクターをされている方からの寄贈の申出によって和紙を支持体とした2点を作品として挙げさせていただいています。どちらの作品も当館所蔵のものに対して小型ではあることで、展示やほかの作品との組合せなどもしやすく、菅作品を紹介する機会を増やすことができるものであると考えております。

続きまして32番と33番、土屋公雄の2点です。こちらは当館で1995年に開催された開館記念展の出品作家である土屋が、今回、作家御本人から2点の寄贈の申出がありました。1点目は「不在」という作品で、金属のフレームに様々なガラスのパターンのつくられた型ガラスをはめ込んで形づくられている家型の彫刻作品、もう一点は「あの時」というタイトルの4つの柱時計による作品となっております。それぞれ90年代、2000年代の作家のキャリアを代表する作品となっております。

34番、ヒーメン・チョンはマレーシア生まれのシンガポール在住の作家で、今年度の30周年記念展の出品作品となっています。この作家も新収蔵となります。近年撮影した200枚の作品と既製の掲示板から構成される作品です。毎日この作品を鑑賞する最初の人、この200枚の写真の中から2枚を選んで展示して、その2枚、個人的な理由で選ばれた2点が、ほかの鑑賞者にとっては別のイメージになり得る、解釈を広げることができるという作品です。

続いて37と38番、松井えり菜は1984年生まれで、昨年度2点作品を購入した作家ですが、今回は個人コレクターの方から寄贈のお申出がありました。2007年にギャラリーでの初個展で展示された作品となります。当館の収蔵作品が2023年の作品となりますので、作家の最初期の作品として、当館のコレクションを補う上でも非常に重要な作品となります。現在、当館の収蔵作品とともにコレクション展に出品しておりますので、後ほど御覧いただきたいと思います。

続いて40番と41番、高田冬彦、こちらでも新収蔵となります。コレクターの方から寄贈のお申出があった作家です。1987年生まれで寓話性とユーモアを備えた映像表現によって性的欲望や親密さに言及し、固定化された男らしさや共同性の在り方について異議を唱える作品で知られて、近年は既存の文化をクィア的視点からの読替えという潮流において世界的な注目も集める作家です。今回は事前に映像のリンクを共有させていただいた2点の寄贈をお諮りしたいと思います。

最後となります42番、藤倉麻子は1992年生まれの作家です。こちらでも新規収蔵になります。都市や郊外を横断的に整備するインフラストラクチャーを、それらに付随する風景の奥行きに注目して、3DCGのアニメーションの手法を用いた作品を制作しています。近年ではヴェネチア・ビエンナーレの建築展の日本代表に選ばれるなどの注目も集めており、デジタルと現実世界の接点を浮かび上がらせる現代性ととも、現在最も評価すべき若手作家の1人です。

以上が今回の作品の概略となります。詳細は引き続き作品を実見しながらお話をさせていただきます。

以上です。

大石文化施設担当課長代理：何か御質問はございますでしょうか。

それでは、これから作品の実見をしたいと思いますので、御案内をお願いします。

(委員離席)

(作品実見)

(委員着席)

大石文化施設担当課長代理：長時間お疲れさまでございました。

作品を御覧になりまして、何か御意見、御質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、評価方法について御説明いたします。

評価表に金額を記載し、署名していただきます。

評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの価格の平均値を委員会としての評価額といたします。金額は税込みのものを御記載ください。

評価方法について何か御質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、お手元のボールペンで御記入をお願いいたします。御記入がお済みになった方は、事務局が確認しますので、お声がけください。確認が終わりましたら、御退席いただいて結構です。

本日はありがとうございました。

(委員評価表記入)

(事務局、評価表確認)

午後 4 時12分閉会

以上